



日本の ハーブづくりの原点

話し手 開聞山麓香料園 副園長

宮崎 利樹さん (昭和46年2月2日生)

聞き手 鹿児島県立 山川高等学校 生活情報科 2年



香りづくりの始まり

プラントハンターをしていた私の祖父が、国産ハーブの香りを作るため、栽培適地を探したら南だったということになりましたね。本当だったら種子島とか屋久島とか奄美とか、南に行けば行くほどよく育つんですけども、輸送を考えたときに当時は鉄道がメイン。最終的には商売ですから、コストも考えると、鉄道が通ってる一番南ということでもうなつたみたいですね。あと開聞は無霜地帯っていうんですけど、霜が降りないんですよ。水をやってもすーっと引いていく土質と、それから気候が一番ベストということでここに決めたわけですね。



今育てているハーブについて

ハーブは、季節によって移り変わりはありますが、大体三十種類くらいあります。芳樟(ほうしょう)をメインにして、レモングラスとかコリアンダーとか、ディールとかローズゼラニウムとかですね。芳樟は一万本くらいあります。効能は、リラックス効果、鎮静効果、気持ち落ち着く、寝つきがよくなるとか、睡眠の質が良くなる。ここは海がすぐそこで、台風の時もすごいですから、芳樟は、防風林も兼ねて中のハーブを守ってくれています。



この園のハーブ栽培の特徴

基本的に無農薬で作っています。農薬は、ミツバチなど植物にとって大事な虫、“益虫”も殺しちゃうんですよ。でもやっぱり害虫は来ってしまう。どうするかっていうと、雑草を少し残すとか、何も農薬をかけないと鳥も来るんですね、その鳥が虫を食べてくれる。虫同士でも餌にする虫がいたりするんです。そうしたらトータルで考えた時には害虫が負けるんですよ。それが一番の特徴ですね。それと、植物を過保護に育てないことです。マルチやビニールをかけたりだと、植物が丈夫に育たないんですよ。植物は人間のために香りを出してるわけじゃないんですね、本来は、植物が自分の体を虫から守るために作ってるんですよ。だから、割と自然に任せたほうが、香りのいいハーブができるんですよ。



ハーブのこれからの在り方

昭和16年、始めた当時は、まだハーブという言葉がなくて、“香料植物”って言ってたんですよ。40年くらい前にやっと“ハーブ”っていう言葉が定着し始めたんです。今ではアロマやハーブを好きなお客様がこの園を目的に足を運んでくれます。

これからはもっと多くの方にハーブの良さを知ってもらって、自分の健康のためにと心地よく過ごしていくための簡単に手に取れるような商品にしていきたいし、薬剤師さんに扱ってもらったり、エッセンシャルオイルを福祉施設で使ってもらいたいですね。



聞き書きコラム



採れるのはわずか“ハーブの一滴”

香料園では、芳樟の葉を毎年6~12月におよそ8t収穫できる。これを大きな釜(葉が500kg入る釜)を使い、蒸留し、芳樟の精油(エッセンシャルオイル)を作る。500kgの芳樟の葉から採れる精油はわずか5kg。つまり、1%しか採れない。芳樟以外のハーブも、葉から採れる精油はほんのわずか。そのため、精油を採るためにはたくさんのハーブを栽培する必要がある。

温暖な気候条件や広い土地が必要であることから、商業用に芳樟など複数のハーブを露地栽培している場所は国内では少なく、それが行われている開聞岳周辺は貴重な場所だ。